

きても成ぜずと云云。余も又年来此の義を存する処、一代聖教は且く之を置く。法花経に入りて此の義を見聞するに、序・正の二段は且く之を置く。流通の一段は末法の明鏡、尤も依用と為すべし。而るに流通に於て二有り。一には所謂迹門の中の法師等の五品。二には所謂本門の中の分別功德の半品より経を終るまでの十一品半なり。此の十一品半と五品と合せて十六品半。此の中に末法に入りて法花を修行する相貌分明なり。是に尚事行かざれば、普賢経・涅槃経等を引き来りて之を糾明せんに、其の隠れ無きか。其の中の分別功德品の四信と五品とは、法花を修行するの大要。在世・滅後の亀鏡なり。荊谿云く、「一念信解は即ち是れ本門立行の首なり」と云云。其の中に現在の四信の初めの一念信解と滅後の五品の第一の初随喜と、此の二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋、十方三世の諸仏の出門なり。天台・妙楽の二の聖賢、此の二処の位を定むるに三の积有り。所謂或は相似の十信・鉄輪の位、或は觀行の五品の初品の位、未断見思、或は名字即の位なり。止觀に其の不定を会して云く、「仏意知り難し、機に赴きて異説す。此を借りて開解せば、何ぞ勞わしく苦ろに諍わん」云云等。予が意に云く、三积の中に名字即は経文に叶うか。滅後の五品の初めの一品を説きて云く、「而も毀咎せずして随喜の心を起す」と。若し此の文相似と五品とに渡らば、「而も毀咎せず」の言は便ならざるか。就中、寿量品の失心・不失心等は皆名字即なり。涅槃経に「若しは信、若しは不信、乃至、熙連」とあり。之を勘えよ。又一念信解の四字の中の信の一字は四信の初めに居し、解の一字は後に奪わるる故なり。若し爾らば無解有信は四信の初位に当る。経に第二信を説きて云く、「略して言趣を解す」と云云。記の九に云く、「唯初信